【 松本ハウス 読売新聞連載①～④ 】

医療ルネサンス №6481

相方は、統合失調症

1/5

困難を笑いに変えて

お笑いコンビ「松本ハウス」のライブは、ハウス加賀谷さん(42)が体験した統合失調症のネタが満載だ。相方の松本キックさん(47)が鋭く突っ込み、会場がどっと沸く。

加賀谷　（喫茶店の）レジ。あれは恐ろしい産業兵器ですよ。（病気のせいで）使い方が覚えられないんです。どうしてもできないのが、個別会計。

キック　複数のお客さんが自分の分を払うやつね。

加賀谷　巧みにレジから逃げ回っていたんですけど、どうしても受け持たないといけなくなって、とっさに思いついたんです。（低い声で）えー、当店は一括会計となっております。

キック　マニュアル変えたらあかんやろ！

初発患者の約半数が回復するとされる統合失調症だが、社会復帰には周囲の支えが欠かせない。加賀谷さんは、病気の影響でセリフが覚えられない、言葉に抑揚をつけられないなどの回復期に起きる様々な困難を、松本さんと乗り越え、新たな笑いを創っている。

松本さんは、統合失調症とつきあっていく上でも、かけがえのない相方だった。

松本さんが加賀谷さんと出会ったのは1991年。お笑いタレントの事務所が開いたオーディションの同期の合格者だった。

何かに追われているように落ち着きがない。生真面目なのに失敗を繰り返す。「何なんだ、こいつ？」。松本さんは興味を持った。

ほどなくして、加賀谷さんのバッグに大量の薬が入っているのを偶然知った。加賀谷さんは少しずつ自分のこれまでを告白した。

中学2年生の時、「幻の声」に襲われた。「なんだよこの臭い。くっせーな」「カガチン、くさいよ」。声に一日中、責め立てられた。実際にはない声が聞こえる「幻聴」だという知識はこの時なかった。

高校では、巨大なうねりとなった廊下に襲われる「幻視」の症状も出た。周りの勧めを受け、自宅を出てグループホームへ。心に問題を抱える人たちと過ごす穏やかな集団生活で、まとわりついていた幻聴はやんだ。ゆとりができて、真剣に考え始めた。「子どもの頃からの夢、お笑い芸人を目指そう」と。

話したら引かれる、という加賀谷さんの思いは杞憂だった。松本さん自身、将来に疑問を持ち、大学を中退して悶々とした時期を過ごしてきた。

「芸人として面白ければええんとちゃう？」

半年後、松本ハウスを結成。松本さん22歳、加賀谷さん17歳の船出だった。

（このシリーズは全5回）

統合失調症　幻覚や妄想に伴って社会生活に支障が出るなどする精神疾患。国内に約80万人の患者がいると推計される。薬物療法や精神療法などにより、初発患者のほぼ半数は長期的な回復が期待できるとされる。

ハウス加賀谷さん（左）の統合失調症の療養を経て、復活したお笑いコンビ「松本ハウス」。相方の松本キックさんと病気のネタも披露する（1月17日、東京都新宿区で）＝鈴木毅彦撮影

過労と過信で体調悪化

1991年、松本キック、ハウス加賀谷のお笑いコンビ「松本ハウス」は誕生した。挙動不審な坊主頭の加賀谷が繰り出す、意表をつくボケ。人気者になるのに時間はかからなかった。

キックの台本に、加賀谷がアドリブをぶつける。それをキックが即興で返す。「創ったネタを舞台で壊してまた創る。それが面白かった」と、松本さんは言う。

90年代後半、テレビ番組「ボキャブラ天国」シリーズに出るようになると一気に知名度が上がった。取材にCM、営業と休みのない日が1年半続いた。

「何を言っても笑ってもらえる。幻聴もない」。積み重なった過労と過信。加賀谷さんが変わり始めた。

自己判断で薬をやめた。数日たつと、薬の離脱症状が襲った。そわそわして感情が入り乱れ、頭が締め付けられた。あざるように大量の薬を一気に飲んだ。

限界が近づいていた。99年末。加賀谷さんは一方的に解散を通告した。松本さんは異変に気づいていた。問いつめても負担になるだけだ、と思った。「1年でも2年でも、10年でもいい。やりたいと思ったら言うて来いよ」。目をそらし、何も答えない加賀谷さんに声をかけた。

1990年代後半、テレビ出演が相次いでいた頃の加賀谷さん（左）と松本さん。この後、加賀谷さんの状態は徐々に悪化していく（松本ハウス提供）

翌年1月。加賀谷さんは精神科病院の閉鎖室にいた。6畳ほどの部屋に布団とむき出しの便器だけ。背後で鉄の扉がガチャンと閉じた。大量の抗精神病薬で幻覚は消え、7か月後に退院したが、待ち受けていたのは、統合失調症の陰性症状と呼ばれる症状だった。

意欲が湧かず、どんよりとした気持ちのまま実家に引きこもる。薬の副作用なのか、水の中にいるようで、現実感がなかった。

松本さんは、ソロライブ、ネタ作家、舞台の役者と、どうにか仕事を続けていた。他の相方は考えられなかった。加賀谷さんへの電話は3か月に1度。「迷惑をかけたという負い目で向こうから連絡は取りづらい。かといって俺が頻繁に連絡したら復帰を焦るに違いない」。そんな配慮で決めた距離。たわいない会話の中に本音がのぞくこともあった。

「人の目が怖いんです。調子の波があって」

「そんな時期もあるよ。のんびりやるしかない」

6年の月日が過ぎた。

「キックさん、薬を変えたら調子がいいんです」

電話の声が明るい。新薬に切り替えたところ、頭がクリアになったという。統合失調症の薬の効果には個人差があり、新薬は加賀谷さんに合っていた。

解散後10年。社会に慣れるため、アルバイトを続けていた加賀谷さんは松本さんに告白した。「もう一度コンビを組みたいんです」

復活ライブ後の違和感

ハウス加賀谷さん(42)の統合失調症の悪化で、テレビから突然姿を消したお笑いコンビ「松本ハウス」。10年後の2009年、長い闘病生活を経て開かれた相方、松本キックさん(47)との「復活ライブ」は大盛況のうちに終わった。

どこの事務所にも所属しない、フリーでの再出発。会場の手配から受付まで、松本さんの妻で元舞台女優の瀬里菜さん(32)が仕切った。加賀谷さんの休業中、一人で活動していた松本さんが役者として舞台に出たことがきっかけで知り合い、07年に結婚していた。

「いや～、おもしろかったよ」。「前よりパワーアップしてるね」。昔の仲間も祝福してくれた。手作りのスタートだったが、前途は明るく感じられた。

しかし、現実は甘くなかった。次のライブに向けた、ネタ合わせ。違和感は早くも芽を吹いた。

「なかなかセリフが覚えられなくて」

加賀谷さんは、松本さんが書く5分のネタを覚えるのに1か月かかった。統合失調症はその影響で、記憶するのが難しいなどの認知機能障害が出ることがある。話している間にもセリフが頭から消えそうになった。

「キックさんが言い終わると、『今だ！ 僕の番だ』と思ってしゃべるんです」

「だからか。ボケる前に変な間が空くんだよな」

感情表現も平板になり、棒読みに聞こえる。セリフに躍動感が失われていた。

トークでも、加賀谷さんは空転した。言い間違いを直そうと言葉を重ねたが、話はまとまらず、意味不明な言動となる。舞台にいることも忘れ、黙りこんだ。

「昔はできたのに、と思ってしまうんです」。加賀谷さんはうなだれた。

「なかなか抜け出せんよなぁ」と松本さん。

「負の連鎖ですね……」

「おぉ、難しい言葉知ってるやん」。松本さんは話をそらした。空気が詰まるのは嫌いだった。

心の中では自問自答を繰り返していた。「焦るな。一番苦しんでいるのは相方の加賀谷だ。俺が加賀谷をどう伸ばすか考えなければ」。だが、どんなに丁寧に説明しても、稽古を繰り返しても、納得のいく笑いは創れなかった。

妻の瀬里菜さんには、いつも本音で語った。瀬里菜さんが応えた。

「病気だからこうしよう、じゃなく今の加賀谷さんを見てあげて。一緒に夢を追いかけていくんでしょ？」

そして、こう問いかけた。

「難しいこと、しようとしてるんじゃない？」

松本さんは、昔のイメージで台本を書いていたことに気がついた。

2009年の復活後の困難を振り返るお笑いコンビ「松本ハウス」のハウス加賀谷さん、松本キックさんと松本さんの妻、瀬里菜さん（左から）

医療ルネサンス
No.6484

相方は、統合失調症

笑いも交え闘病語る

ハウス加賀谷さん(42)の統合失調症の療養を経て、相方の松本キックさん(47)と再結成したお笑いコンビ「松本ハウス」は2011年、新人と同じ扱いで大手芸能事務所と契約を結んだ。事務所のライブに出る前に、関係者に披露する「ネタ見せ」で、先輩芸人で放送作家に転身した森光司さん(48)と再会した。

重い症状は回復したが、加賀谷さんは病気の影響でセリフがうまく思い出せない。ギクシャクした掛け合い。松本さんは心のどこかで同情を期待していた。

「加賀谷君は前からこんな感じだったよ」。森さんの指摘は意外だった。「キック君、ダメだよ加賀谷君のせいにしちゃ。加賀谷君は良くも悪くもこのまんまの人なんだから」

松本さんはハッとした。加賀谷さんのフォローを気にするあまり、ツッコミの切れが鈍っていたことに気がついた。加賀谷さんも「以前はできたのにという思いが強すぎて、昔の自分が美化され過ぎていたんです」と振り返る。

その頃から、一風変わった稽古を始めた。松本さんが「あにゃにゃ～」というと、加賀谷さんが「むにゃにゃ～」と言い返す。セリフは一切なしで、テンポと間をつかんでいく。

「笑いは膝で取れ。棒立ちになるのが一番あかんやろ」。「わからなくなったら『何でしたっけ?』でええんや。本番でもどんどん失敗してくれ」。松本さんのアドバイスで、掛け合いは少しずつ良くなった。次第にセリフを覚えるのも早くなった。

自分たちの芸に納得がいくと、統合失調症の闘病生活も積極的に公表するようになった。ライブの他に患者家族向けの講演会でも時にシリアスに、時に笑いを交え、体験を語る。

「彼らの道は、お笑いの王道とは違う獣道。誰もが想像しない方法で成功していくのを見てみたい」と森さんもエールを送る。

先月、東京都練馬区の講演会。

キック こうしているうちに加賀谷君、できることが広がってきたんです。

加賀谷 お笑い芸人になってから入院するまでをAとしますね。入院してから再結成するまでをBとします。でも、その後、Aに戻ったわけではないんです。Cという新しい人生の章が始まった、と思えるようになったんですね。

キック じゃあDはどうなっちゃうんでしょうね?

加賀谷 D? (焦って)ど、どーしようもないですね～。

キック ちょっとまだボケが回復段階にあるようですので。

会場が、また沸いた。

東京都内で病気の体験を語る加賀谷さん(左)と松本さん。最近ではライブの他に患者家族向けの講演会や統合失調症の本の執筆活動も行っている(松本ハウス提供)